

細野要齋著 『尾張名家誌』 訳注稿 (三)

尾張名家誌研究会 (主編) 大島絵莉香 (訳注) 田中千寿

服部寛風・小崎智則・森翔大・石丸羽菜

はじめに

本稿は、『尾張名家誌』の訳注稿である。凡例は前稿「尾張名家誌訳注稿(二)」(『名古屋大学中国語学文学論集』第二十六輯二〇一三年 名古屋大学中国文学研究室 所収)を一部変更、また追加した。本稿では六名分の訳注を掲載し、以降も継続する予定である。なお、前稿同様、訳注の対象となる儒学者の順は、必ずしも『尾張名家誌』に従うものではない。

以下、凡例で新たに変更・追加した項目については、末尾に「新」と付け加えた。

【凡例】

底本は愛知県西尾市岩瀬文庫蔵、細野要齋著『尾張名家誌』初編、二卷二冊 安政四(一八七五)年刊本を用いた。

本文についての凡例は以下である。

- ・本文の句読点は、原典に従う。
- ・字体は可能な限り原典に従う。
- ・割注は「」で示した。

・割注には句読点がないため、文意に則して附した。

・本文に一字ほどの空格のあった箇所は、□で表す。

・訓点の不鮮明な箇所は国立国会図書館本を用いて補ったが、注記

しない場合がある。

・訓点の合字は開いた。(メ↓シテ 等)

書き下し文についての凡例は以下である。

- ・原則として古文仮名遣いとする。
- ・訓点の合字は開いて書き下した。
- ・本文にない句読点を加える場合があるが、注記しない。
- ・ルビは現代仮名遣いとする。
- ・割注は「」で示した。
- ・本文中の空格は、表記せずに書き下した。
- ・書き下し文の漢字の字体は、本文に従う。〔新〕
- ・書き下し文は、本文の訓点に従わないことがある。〔新〕

語注についての凡例は以下である。

- ・語注は見出しも含め、常用字体を用いた。〔新〕
- ・見出しの番号の順序は、書き下し文の順序に従う。
- ・見出しは本文の訓点を省く。〔新〕
- ・『名古屋市史』は、(名古屋市役所著 名古屋市発行 一九一五〜一九一六年)を用いた。以下、編名のみ記す。

・『名古屋叢書』は、校訂・復刻版の正編(名古屋市教育委員 会編、愛知県郷土資料刊行会発行 一九八二〜一九八三年)・続編(名古屋市教育委員会編、名古屋市教育委員会発行 一九六四〜一九七二年)を用いた。以下、巻数のみ記す。

・中国の経典・史書を挙げることがあるが、『尾張名家誌』と経書・史書の間には介在するテキストの存在を否定するものではない。

・前稿の「細野要齋著『尾張名家誌』訳注稿」・「細野要齋著『尾張名家誌』訳注稿(二)」を用いる時には、それぞれ「前稿(一)」・「前稿(二)」と記す。〔新〕

なお、原本の複写と閲覧にご協力くださった西尾市岩瀬文庫に御礼申し上げます。

三、深田圓空

【本文】

深田得和字正室。以レ字行號「圓空」。犬山城主石川光吉〔任ニ備前守〕孫。居ルニ美濃加茂郡深田村ニ因氏焉。為レ人剛毅穎敏。入レ京受ニ學于堀杏菴ニ。兼精ニ天文地理ニ。寛永辛未獻ニ所著萬國全圖。及所製準天儀於「敬公」。公特鑒賞。更獻ニ之「幕府」。遂承「命」與ニ堀杏菴如「江戸」。幕府召見褒之賜ニ黃金ニ。丙子七月初仕ニ本府為ニ儒官ニ。而猶家ニ于京。有ニ公事則往來武尾以服職。嘗精思製自鳴鐘。亦獻之「敬公」。世目レ此曰「正室時計」〔世俗稱ニ自鳴鐘為ニ時計〕。又得下織唐織錦及繡絹一方。傳ニ之西陣〔地名〕職工。職工至レ今鬻ニ此二物為ニ上品。實受ニ圓空之賜云。寛文癸卯四月十七日歿。葬ニ于城南徳林寺。

【書き下し文】

深田得和、字は正室。字を以て行はれ、圓空と號す。犬山の城主石川光吉〔備前守に任ず〕の孫なり〔1〕。美濃加茂郡深田村に居る、因りて氏とす〔2〕。人と為り剛毅穎敏。京に入りて學を堀杏菴に受く〔3〕。兼て天文地理に精し。寛永辛未

著す所の『萬國全圖』〔4〕及び製する所の準天儀〔5〕を敬公に獻ず。公、特に鑒賞し、更に之を幕府に獻ず。遂に命を承けて堀杏菴と江戸に如く。幕府召見して之を褒し、黄金を賜ふ〔6〕。丙子七月〔7〕初めて本府に仕へて儒官と為る。

而るに猶ほ京に家す。公事有れば則ち武尾に往来し、以て職に服す。嘗て思を精しくし、自鳴鐘〔8〕を製す。亦、之を公に獻ず。世、此を目して正室時計と曰ふ〔世俗に、自鳴鐘を稱して、時計と為す〕。又唐織錦及び繡絹を織る方を得、之を西陣〔地名〕の職工に傳ふ。職工今に至るまで此の二物を鬻ぎて、上品と為す。實に圓空の賜を受くと云ふ。寛文癸卯四月十七日歿す。城南の徳林寺〔9〕に葬らる。

【語注】

〔1〕石川光吉―石川氏は源（多田）満仲の末裔で、石川光治が承久の乱（一二二一年）の功により美濃国厚見郡市橋荘の地頭となつてから美濃に住んだ。子孫の光延は織田信長に仕え、その子の光政・光重は豊臣秀吉に従つた。光重の子の光元・光吉はそれぞれ播州竜野城主・尾州犬山城主となり、関ヶ原の戦いでは西軍に属

した。『士林沂洄』（『名古屋叢書続編』第二十卷）では、光吉が関ヶ原の敗戦後に京に行き宗休と号し、これが深田家の始まりかもしれないとするが、やや確証に欠けるように思われる。

〔2〕美濃加茂郡深田村―現在の岐阜県美濃加茂市深田町・加茂郡坂祝町酒倉深田。中山道の難所とされる木曾川の大田の渡し場（大田村）の南西に位置する。豊臣秀吉配下の犬山城主は、信州木曾代官及び木曾・飛騨川の支配も兼任したことから、この地とも縁があった可能性がある。

〔3〕堀杏菴―前稿（一）に掲載。

〔4〕万国全図―海野一隆氏は、マテオ・リッチ（利瑪竇）『坤輿万国全図』の日本列島一帯を改訂したものが、正室の『万国全図』であろうとしている。

海野一隆「深田正室の『万国全図』―渾天儀」「自鳴鐘」

（『東西地図文化交渉史研究』 清文堂 二〇〇三年）参照

〔5〕渾天儀―海野氏前掲論文では、洪川春海・春海の弟子である谷棗山による「渾天儀（渾儀）」についての記述から、正室の渾天儀とは、渾天儀に独自の工夫を加え

たものであろうと推測している。渾天儀は、古代中国で用いられた天体の位置を測定する機器。日本では江戸時代から使用された。洪川春海が中国古来のものを簡素化し、「新制渾天儀」と名づけて用いて以後、幕府天文台において同型のもものが観測に使用された。現存のものは、模型として教育・説明などに使用された小型のものが多い。

西城惠一・鈴木一義「国立科学博物館新蔵の日本製渾天儀の特徴」（『国立科学博物館研究報告E類…理工学』第二十八巻 二〇〇五年）参照

〔6〕幕府召見―『尾藩世記』（『名古屋叢書』第三巻）寛永八（一六三一）年四月十九日に「大樹、遺し、覆盆子を賜ふ。公、直ニ登營、拝謝す。時ニ儒士正意及弟子深田正室、陪従。正室か撰する処の地球図 大樹に呈せらる。幕府家令阿部河内守、及正意正室等を召て、撰者の功労を賞し、正室ニ黄金若干を賜ふ」とある。本文の寛永辛未から続けて読むと、僅か三ヶ月余りの間に、敬公（義直）への献上・義直から幕府への献上・命を受けての江戸行きということになる。

〔7〕丙子七月―寛永十三（一六三六）年七月のことと思われるが、『尾藩世記』の該当箇所には正室仕官の記録は無い。

〔8〕自鳴鐘―西洋式の機械時計。フランシスコ・シヤビエルが天文二十（一五五一）年に大内義隆に献上したものが、日本へもたらされた最も早いものであるとうさされている。十六世紀末から十七世紀初め頃には、宣教師の指揮監督により長崎で製作されていたようである。尾張藩御時計師兼鍛冶頭の津田助左衛門家の初代政之は京都に住んでいたが、家康所有の朝鮮から伝来した「自鳴磬」^{トケイ}が壊れ、修理できる人間を洛中で探した際に、「深田正室と議して駿府に参り」（『尾張志』）、修繕したことが、徳川家に仕えるきっかけとなったという。

山口隆二『日本の時計』（日本評論社 一九五〇年）参照

〔9〕徳林寺―永禄十一（一五六八）年建立。号は亀松山、浄土宗。

深田得和、字は正室。字で呼ばれており、号は円空であった。大山城の城主石川光吉（備前守に任ぜられた）の孫である。

美濃加茂郡深田村に住んでいたので、深田を氏とした。その人柄は意思が強く才能にあふれていた。京に行つて堀杏菴に学んだ。天文と地理の両方に精通していた。寛永八（一六三一）年、その著『万国全図』と制作した準天儀を尾張藩主徳川義直に献上した。義直は特に鑑賞して、更に幕府に献上した。とうとう命を受けて堀杏菴と共に江戸へ行つた。將軍に拝謁して、褒美として黄金を下賜された。寛永十三（一六三六）年七月、儒官として尾張に召し抱えられた。しかし、依然として京に住んだ。用事があれば、江戸・名古屋へ出向いて、仕事を行つた。以前にいろいろと考えて自鳴鐘を制作した。これもまた義直に献上した。世間ではこれを正室時計と言つた（世間では俗に自鳴鐘のことを時計と言つた）。また、唐織錦と縞絹の織り方を考案して、それを西陣（地名）の職工に伝えた。職工は今に至るまでこの二つの織物を、高級品として商つており、本当に円空のおかけであると言っている。寛文三（一六六三）年四月十七日に亡くなった。名古屋城の南の徳林寺に葬られた。

十三、清水春流

【本文】

清水仁字春流。釣虚散人賣文翁皆其別號。少讀濂洛之書。後從黃檗木菴〔名性瑠〕深究禪理。又精易學善和歌。為人風流温雅。居常愛詩酒。壯歲負笈於濃參之間。後入京又去之難波。留九年歸郷。居亡幾如伊勢桑名。以教授為業。嘗著賣文翁傳。以擬陶淵明五柳先生傳。其畧云。我未有環堵之室。生涯如浮萍。身世似水雲。往往以其所居為家。委性命任去留。嗒焉忘人間得喪。迺其娛樂在於酒將詩。元禄年間人也。所著有周易或問。心詩百咏。釣虚詩集。儒家十牛圖。百絶詩草。釣虚弄筆。續徒然草。徒然草新註。法語。懺悔物語。三教同旨等。行于世。

【書き下し文】

清水仁、字は春流〔1〕。釣虚散人・賣文翁、皆、其の別號な

り。少にして濂洛の書〔2〕を讀む。後、黄檗木菴〔名は性瑠〕〔3〕に従ひ、深く禪理を究む。又、易學に精しく和歌を善くす。人と為り風流温雅。居常、詩酒を愛す。壯歲〔4〕、笈を濃參の間に負ひ〔5〕、後、京に入り又去りて難波に之く。留まること九年にして郷に歸る。居ること幾も亡ふして〔6〕伊勢桑名に如き、教授を以て業と為す。嘗て「賣文翁傳」〔7〕を著し、以て陶淵明「五柳先生傳」〔8〕に擬す。其の畧に云ふ、我未だ環堵の室を有さず〔9〕。生涯、浮萍のごとく、身世、水雲に似たり〔10〕。往往にして其の居る所を以て家と為す。性命に委し去留に任じ〔11〕、嗒焉として人間の得喪を忘る〔12〕。迺ち其の娛樂、酒と詩とに在り〔13〕、と。元禄年間の人なり。著す所、『周易或問』・『心詩百咏』・『釣虚詩集』・『儒家十牛圖』・『百絶詩草』・『釣虚弄筆』・『續徒然草』・『徒然草新註』・『法語』・『懺悔物語』・『三教同旨』等有り。世に行はる。

【語注】

〔1〕 清水仁—寛永三(一六二六) 〳?。年譜は、市古夏生氏「清水春流について——付略年譜——」(早大文学

- 部暉峻研究室『近世文芸研究と評論』三 一九七二年）
 及び『近世文学資料類従』仮名草子編一六（勉誠社
 一九七三年）の野田千平氏の解題に掲載されている。
 [2] 濂洛之書―前稿（二）の「並河魯山」注〔3〕参照。
 [3] 黄檗木菴―明末の渡来僧。明暦元（一六五五）年来日。
 「黄檗」とは臨済宗黄檗派（黄檗宗）のこと。
 [4] 壮歳―前稿（二）の「並河魯山」注〔6〕参照。
 [5] 濃参之間―濃州（美濃国）と参州（三河国）の間。
 [6] 亡幾―多くないこと。ここでは歳月の経たぬこと。『漢
 書』王莽伝顔師古注「亡幾、不多也。亡説曰無。幾音
 居豈反。云々」
 [7] 壳文翁伝―『釣虚弄筆』所録。吉沢真人『釣虚弄筆』…
 解題と翻刻」（『金城学院大学論集』国文学編十八 一
 九七六年）に翻刻がある。
 [8] 陶淵明五柳先生伝―架空の人物五柳先生の伝記。陶淵
 明の作であり、彼の自伝的作品とも言われるが定かだ
 はない。
 [9] 環堵之室―四方を一堵の土壁で囲まれた狭い家。『礼記』
 儒行篇「儒有一畝之宮、環堵之室」、また「五柳先生伝」

- の「環堵蕭然、不蔽風日」という表現を踏まえている。
 [10] 生涯如浮萍身世似水雲―生涯も身世も一生の意。浮萍
 は浮草。水雲は水面に浮かぶ雲。
 [11] 委性命任去留―陶淵明「歸去來辭」の「曷不委心任去
 留」を踏まえる。「五柳先生伝」にも「既醉而退、曾不
 吝情去留」と「去留」の語が見える。
 [12] 嗒焉忘人間得喪―「五柳先生伝」の「忘懷得失」に対
 応する。「嗒焉」は茫然としてわれを失ったさま。嗒焉
 に同じ。『莊子』齊物論篇「南郭子綦隱机而坐、仰天而
 嘘、嗒焉似喪其耦」
 [13] 迺其娛樂在酒將詩―「五柳先生伝」の「常著文章自娛」、
 及び、賛の「酣觴賦詩、以樂其志」に対応する。
 【現代語訳】
 清水仁、字は春流。釣虚散人・壳文翁は、いずれもその別号
 である。幼いころから宋学の書物を読んでいた。後に、黄檗
 木菴（名は性瑄）に従って学び、深く禅学の教えを究めた。
 さらに、易学に精通し和歌を得意とした。穏やかで品のある
 人物であり、いつも詩と酒とを愛していた。三十代で、美濃

と三河の間に遊学し、その後、京に入り、さらに離れて難波に行つた。九年難波に留まつて帰郷した。長居することなく伊勢の桑名に行き、講義を生業とした。以前に「売文翁伝」を著し、それを陶淵明の「五柳先生伝」になぞらえた。その大略にこうある、「私は今まで自宅を設けたことがない。私の生涯は、浮草や水面の雲のようであり、いつも自分がある場所を家とした。持つて生まれた性質に委ね、あるがままに任せ、茫然として世間の成功と失敗を忘れてしまう。かくて私の娯楽は、酒と詩とに存在しているのだ」と。元禄年間（一六八八〜一七〇四年）の人である。著作には、『周易或問』・『心詩百咏』・『釣虚詩集』・『儒家十牛図』・『百絶詩草』・『釣虚弄筆』・『統徒然草』・『徒然草新註』・『法語』・『懺悔物語』・『三教同旨』等があり、流行した。

（服部寛風 記）

十九、朝比奈玄洲

【本文】

朝比奈文淵字「涵徳號」玄洲。通稱甚左衛門。父某為「本府世臣」。

玄洲其次子也。起家為右筆。祇役江戸。師事荻生徂徠。尤長詩章。又善書。凡有衣帛新成者。則必先書而後附。染匠。享保己亥朝鮮使見其書深嘆服。其所筆談唱和者。集曰「客館瓊漿集」行于世。享保甲寅正月十二日歿。葬于城東乾徳寺。終身不娶。無嗣家絶。

【書き下し文】

朝比奈文淵、字は涵徳、玄洲と號す。通稱は甚左衛門。父某「1」、本府の世臣たり。玄洲は其の次子なり。家より起ちて右筆「2」と為る。江戸に祇役「3」し、荻生徂徠「4」に師事す。尤も詩章に長ず。又書を善くす。凡そ衣帛新たに成る者有れば、則ち必ず先づ書して而して後、染匠に附す。享保己亥、朝鮮使「5」其の書を見て深く嘆服す。其の筆談唱和する所の者、集めて客館瓊漿集「6」と曰ひ、世に行はる。享保甲寅正月十二日歿す。城東の乾徳寺「7」に葬る。終身娶らず。嗣無くして家絶ゆ。

【語注】

「1」父某——『士林泝洄』卷八十六によると、通稱は甚三郎、

与右衛門。元禄六（一六九三）年二月二十六日に父の家領を継ぎ、御馬廻となる。その後、宝永四（一七〇七）年に御馬廻小頭となる。享保三（一七一八）年十二月晦日に没したという。

〔2〕右筆―武家の秘書のこと。名古屋市鶴舞中央図書館蔵分限帳（元禄之末宝永正徳享保頃迄、謄写本）によると、「御右筆」の「享保五年」に「三十石 朝比奈甚左衛門」の記述が認められる。

〔3〕祇役―前稿（二）の「須賀亮斎」注〔7〕参照。

〔4〕荻生徂徠―前稿（二）の「関祖洲」注〔8〕参照。

〔5〕朝鮮使―第九回朝鮮通信使。この年、徳川吉宗が將軍職を襲ったことに対する祝いとして、申維翰^{シユハン}らが遣わされた。

〔6〕客館璀璨集―二巻一冊本。木下蘭臯が編じ、享保五（一七二〇）年に刊行された。

〔7〕城東乾徳寺―妙心寺の末寺。もとは丹羽郡楽田村にあった。天正五（一五七七）年、明久の創建、東叔紹を開山とする。寛永十（一六三三）年に伝馬町に移動した。

（『名古屋市史』社寺篇 参照）

【現代語訳】

朝比奈文淵、字は涵徳、玄洲と号した。通称は甚左衛門。父の某は、尾張藩に代々仕える家臣であった。玄洲はその次男である。玄洲はその家から出世して右筆となった。君主に従って江戸に参勤し、荻生徂徠に師事した。とりわけ詩や文章を作ることに長けていた。また、書に熟練していた。絹の衣服の新たに完成したものが有ればすべて、必ず最初に書きつけて、それから染物屋にあずけていた。享保四（一七一九）年、朝鮮通信使が彼の書を見て深く感服した。その時彼らが筆談・唱和した作品は、集められて『客館璀璨集』といい、世に通行した。享保十九（一七三四）年正月十二日に没した。名古屋城の東の乾徳寺に葬られた。生涯、妻を娶ることなく、跡継ぎがなく家が絶えた。

（大島絵莉香 記）

二十三、松平君山

【本文】

松平秀雲^ハ字子龍。號^ス君山又龍吟子^ト。通稱^ハ太郎左衛門。本氏^ハ

千村。幼^{ニシテ}而岐疑。七八歳讀^レ書作^ル詩。學無^ノ常師^一。既長^{シテ}松平久忠以^ニ其女^ヲ妻^シ之且乞^テ爲^レ嗣^ト。享保甲辰襲^フ祿。寛保癸亥爲^ニ書物奉行^ト。博聞強識。自^ニ諸子百家^一至^{マテ}野史稗說^ニ無^レ不^レ涉獵^セ焉。詩文亦下^{セハ}筆直^ニ成。資性愷悌愛^ス人。就學者多^シ。國中有名之士多出^ツ其門^ニ。嘗奉^テ命^ニ編^ニ選尾張府志^ス。士林沂洄等數十部。又有^レ命^ニ采^下舶來藥卉菜菓之有^レ益^ニ民用^者。相^ニ地之所^ヲ宜^キ種^レ之。前後得^ル賞賜^ニ數^タ焉。明和甲申朝鮮使來聘。過^ニ府下^ニ館^ス城南性高院^ニ。君山攜^ヘ其子霍山。及孫伯邦^一。唱^ニ和於賓館^ニ。使人南秋月^一名玉嘉嘆曰。三世一席各贈^ル瓊篇^ヲ希代之珍也。編^ニ其詩^ヲ曰三世唱和^ト。行^ニ于世^ニ。天明辛丑致仕。癸卯四月十八日歿。享年八十七葬^リ于城南性高院^ニ。所^レ著^ス有^ニ年中行事故實考^一。本草正譌。弊帚集。表海英華。孝經直解。樂府尋源。群書品節。博覽錄要。詩經國風衍義。南軒日課等^一。尾張府志。及岐阜志畧。木曾志畧。事蹟錄^ノ四編^ハ。則藏^テ在^ニ官庫^ニ不^レ布^ニ于世^ニ。

【書き下し文】

松平秀雲、字は子龍、君山又龍吟子と號す。通稱は太郎左衛門。本氏は千村〔1〕。幼にして岐疑〔2〕。七、八歳にして

書を讀み詩を作る。學に常の師無し。既に長じて、松平久忠、其の女を以て之に妻し且つ乞ひて嗣と爲す。享保甲辰、祿を襲ふ。寛保癸亥、書物奉行〔3〕と爲る。博聞強識、諸子百家より野史稗說に至るまで涉獵せざるは無し。詩文も亦た筆を下せば直に成る。資性愷悌〔4〕、人を愛す。就きて學ぶ者多し。國中の有名の士、多く其の門に出づ。嘗て命を奉じて『尾張府志』〔5〕・『士林沂洄』〔6〕等數十部を編選す。又命有りて舶來の藥卉菜菓の民用に益有る者を採り、地の宜しき所を相て之を種ふ。前後賞賜を得ること數たび。明和甲申、朝鮮使〔7〕來聘す。府下を過ぎ、城南性高院に館す〔8〕。君山、其の子霍山、及び孫伯邦〔9〕を攜へ、賓館に唱和す。使人南秋月〔10〕名玉嘉嘆して曰く、三世一席して各おの瓊篇を贈るは希代の珍なり、と。其の詩を編じて『三世唱和』と曰ふ。世に行はる。天明辛丑、致仕す。癸卯四月十八日歿す。享年八十七、城南性高院に葬る。著はす所『年中行事故實考』・『本草正譌』・『弊帚集』・『表海英華』・『孝經直解』・『樂府尋源』・『群書品節』・『博覽錄要』・『詩經國風衍義』・『南軒日課』等有り。『尾張府志』及び『岐阜志畧』・『木曾志畧』・『事蹟錄』の四編は、則ち藏して官庫に在り世に布

されず。

【語注】

〔1〕 本氏千村―『士林沂洄』卷二十五(『名古屋叢書』続編第十八巻所収)には君山が「土龍」と立項されており「実千村作左衛門男、享保九年辰四月朔日、父遺跡内賜二百五十石、為御馬廻」。寛保三年亥十一月六日、為御書物奉行」とある。

〔2〕 岐嶷―幼くして優秀であり卓越していることをいう。

〔3〕 書物奉行―家康旧蔵の「駿河御謄本」および初代藩主義直以来の歴代藩主が収集した書物を納める名古屋城二の丸の「御文庫」の管理・分類・整理等に従事する役職。万治元(一六五八)年に第二代藩主光友によって初めて置かれた。

〔4〕 愷悌―凱弟に同じ。楽しみ和らぐ意。

〔5〕 尾張府志―『張州府志』三十巻。第八代藩主宗勝の命を受けて千村伯済とともに編纂した尾張藩の地誌。宝暦二(一七五三)年修撰。

〔6〕 士林沂洄―藩命を受けて外祖父の堀忘斎が編纂してい

た尾張藩士の系図。君山が補遺し延享四(一七四七)年に献上。家臣団を仕官の系譜別に十六に分類している。

〔7〕 朝鮮使―將軍家治の襲封を祝賀するために遣わされた、趙曦を正使とする第十一回朝鮮通信使。

〔8〕 館城南性高院―朝鮮通信使の江戸までの道中では、各地の諸大名が接待に動員され、尾張名古屋では性高院が宿所となった。

〔9〕 其子霍山及孫伯邦―次稿に掲載予定。

〔10〕 使人南秋月―南玉。朝鮮通信使の随員で、公式の文書を作成したり、日本の文人と漢詩文を交換したりする製述官の任にあつた。

【現代語訳】

松平秀雲、字は子龍、君山、さらには龍吟子と号した。通称は太郎左衛門といい、本姓は千村氏である。幼少より優秀で抜きんでており、七、八歳で早くも書を読み、漢詩を作った。これといって決まった学問の師はなかった。成長すると、松平久忠は息女を嫁がせた上で、願い出て養嗣子とした。享保

九（一七二四）年、家禄を継承した。寛保三（一七四三）年、書物奉行となった。博聞強識で、諸子百家より野史稗説に至るまであらゆる書物を渉猟していた。詩文においても即座に創作してみせた。明朗な性格で、人当たりがよかった。弟子となつて学ぶ者が多く、尾張の著名人が門下から輩出している。命を受けて『尾張府志』・『土林沝洄』など数十部を編選したことがあつた。また別の命を受けて舶来の菓草や野菜、果物のうち、民衆の役に立つものを選んで、適切な土地を判断して植えたこともあつた。これらの功績によって何度か賞賜を受けた。明和元（一七六四）年、朝鮮通信使が来訪した際、尾張城下において、城南の性高院に宿泊した。君山は子の霍山および孫の伯邦を連れて宿を訪れ、詩歌を応酬した。随員の南秋月（名は玉）は褒め称えて、三世代が同席して、それぞれ珠玉の作品を贈るとは滅多にないことだ、と述べた。その折りの詩を編纂して『三世唱和』と言つたものが、世間によく知られている。天明元（一七八一）年に公職を辞した。同三（一七八三）年四月十八日に没した。享年は八十七、城南の性高院に葬られた。著作として『年中行事故事実考』・『本草正譌』・『弊帚集』・『表海英華』・『孝経直解』・『楽府尋源』

『群書品節』・『博覧録要』・『詩経国風衍義』・『南軒日課』などがある。『尾張府志』・『岐阜志略』・『木曾志略』・『事蹟録』の四編は官庫に収蔵されて世に出ていない。

（小崎智則 記）

二十九、堀田恒山

【本文】

堀田方舊字維新號_ス恒山_ト。通稱_ハ治右衛門。世仕_フ本府_ニ。父曰_ニ正英_ト。恒山_ハ為_レ人敏博。善屬_ス文。為_ニ松平君山高弟_ニ。率_ニ勉後進_ヲ多_シ所_ニ獎成_ス。歴_テ諸職_ニ為_ニ先手物頭_ト。既_ニ致仕_シ寄_ニ心事外_ニ。逍遙自適_ス。寛政辛亥七月二十日歿_ス。享年八十三葬_ニ城南總見寺_ニ。所_レ著有_ニ護花關録稿_ト。及隨筆若干卷_ト。

【書き下し文】

堀田方舊、字は維新、恒山と號す。通稱は治右衛門。世々本府に仕ふ。父正英と曰ふ。恒山人と為り敏博。善く文を屬す。松平君山の高弟たり。後進を率勉して獎成（一）する所多し。諸職を歴て先手物頭（二）と為る。既にして致仕し心を事外

に寄せ、逍遥自適す。寛政辛亥七月二十日歿す。享年八十三、城南の總見寺〔3〕に葬る。著す所、『護花關録稿』〔4〕及び『隨筆』若干卷有り。

【語注】

〔1〕 槩成―助けすめるさま。

〔2〕 先手物頭―城内外の警護や市中の警護に当たった役職。

先手弓頭、先手鉄砲頭がある。

〔3〕 總見寺―臨濟宗妙心寺派の寺。現在、名古屋市中区大須三丁目にある。もとは伊勢大島村にある講寺で西明寺といった。虎関師鍊が神贊寺と改め、後醍醐天皇の勅命により官寺となった。後に安国寺となる。天正頃に廃亡しかけていたものを、織田信雄が父（信長）の菩提を弔うために清洲北市場に移した。この時、總見寺と改名された。慶長十六年、現在の地に移された。

（『名古屋市史』社寺篇 参照）

〔4〕 護花關録稿―堀田恒山の詩体別詩集。巻末には文集を収める。護花関は別号。岩瀬文庫に『護花関隨筆』とともに所蔵されている。

【現代語訳】

堀田方旧、字は維新、恒山と号した。通称は治右衛門。代々尾張藩に仕えた。父は正英という。恒山の人となりは聡明博学で、文章を書くのが上手であった。松平君山の高弟であった。後学を率いて育成することが多かった。諸職を歴任し、先手物頭となった。やがて官職を退き、俗世の外に関心を寄せ、のびのびと自由気ままに生きた。寛政三（一七九一）年七月二十日に没した。享年八十三歳、名古屋城南の總見寺に葬られた。著書に『護花關録稿』及び『隨筆』若干巻がある。

（森翔大 記）

三十、中村厚齋

【本文】

中村政峯號^ス厚齋^ト。通稱^ハ覺藏。本府世臣也。父曰^ニ政順。厚齋^ト為人剛^{トシテ}而敏^シ。少^{ニシテ}受^ク業于小出侗齋。侗齋歿^{シテ}從^ヒ蠲養齋。事^レ之猶^ニ子^ニ事^フ父^ニ。讀^ク書^ル了^シ義實踐體察。家道^ニ依^リ朱子家禮^ニ始^テ制^ス祠堂^ヲ。至^レ今^ニ子孫堅守^ニ其法^ヲ云。安永己亥四月二日歿^ス。

享年六十八葬于城南瑞寶寺^二。

【書き下し文】

中村政峯、厚齋と號す〔1〕。通稱は覺藏。本府の世臣〔2〕なり。父を政順〔3〕と曰ふ。厚齋、人と為り剛にして敏たり。少にして業を小出侗齋〔4〕に受く。侗齋、歿して懈養齋〔5〕に従ふ。之に事ふるに猶ほ子の父に事ふるがごとし。書を讀み義を了る、實踐體察す。家道、一に『朱子家禮』〔6〕に依り、始めて祠堂〔7〕を制す。今に至るまで子孫、堅く其の法を守ると云ふ。安永己亥四月二日、歿す。享年六十八、城南の瑞寶寺〔8〕に葬る。

【語注】

〔1〕 中村政峯号厚齋―『士林沂洄』卷四十三(『名古屋叢書』続編第十八卷所収)の中村家家系図には、中村厚齋について「父家領内、賜二百石、為御馬廻」。寛保三年亥閏四月、為五十人御目付。同年九月、依病免職、為御馬廻」とある。

〔2〕 本府世臣―「世臣」は、前稿(二)の「沖野南溟」注〔3〕

参照。

前掲注〔1〕『士林沂洄』卷四十三の中村家家系図には、厚齋の曾祖父にあたる「某(通稱は覺左衛門)」について「敬公御代、被召出、附属瑞公御部屋、為御徒、賜俸」とあり、その後中村厚齋に至るまで、代々尾張藩に仕官したと記録されている。

〔3〕 政順―前掲注〔1〕『士林沂洄』卷四十三の中村家家系図でも、「政順」が厚齋の父とされる。政順については「宝永元年申四月廿八日、父家領内賜二百石、為御馬廻」。元文四年未八月卒」とある。

〔4〕 小出侗齋―前稿(二)に掲載。

〔5〕 蟹養齋―次稿「蟹養齋」に掲載予定。

〔6〕 朱子家礼―朱熹が編纂した冠婚葬祭の礼儀作法を説く書物。『朱子家礼』は朱子学とともに東アジア各地に伝播した。日本においても十七世紀後半から本格的に『朱子家礼』が受容されはじめ、『朱子家礼』の和刻本や、日本人の著した『朱子家礼』関係書が刊行された。中村厚齋は、『朱子家礼』を重視する闇齋学派の浅見綱齋・三宅尚齋の孫弟子にあたり、弟の中村習齋にも家礼

に關する著作がある。

参考…吾妻重二「江戸時代における儒教儀礼研究—書誌を中心

に—」『アジア文化交流研究』第二号 関西大学アジア

文化交流研究センター 二〇〇七年

田尻祐一郎「儒学の日本化—關齋学派の論争から」『日

本の近世十三 儒学・国学・洋学』中央公論社 一

九九三年

〔7〕祠室—先祖をまつるところ。『朱子家礼』「通例」の「祠堂」に類するものと推察される。江戸時代の日本では、生活環境に合わせて『朱子家礼』を変化させて受容していた。たとえば、浅見綱斎の孫弟子にあたる中井整庵(元禄六(一六九三)〜宝暦八(一七五八)年)『喪祭私説』では、『朱子家礼』では独立した建築物である「祠堂」を、建築物のうちの一室の一部分を「祠室」とすることで代替可能としている。

参考…湯浅邦弘「朱子「家礼」と懷徳堂『喪祭私説』(吾妻重

二・朴元在編『朱子家礼と東アジアの文化交流』汲古

書院、二〇一二年)

〔8〕城南瑞宝寺—浄土宗鎮西派の寺院。京都知恩院の末寺

で、教宮山と号する。久野総左衛門が建立し、正蓮社違

玄治が開山した。もと清須にあったが、慶長年間に中区

白川町に移転した。現在は名古屋市瑞穂区萩山町にある。

(『名古屋市史』社寺編)

【現代語訳】

中村政峯、厚齋と号した。通称は覚藏。尾張藩に代々仕える家臣であった。父を政順といった。厚齋は、性格が剛健で鋭敏であった。若くして学問を小出侗齋に受けた。侗齋が没して、蟹養齋に従学した。蟹養齋に師事するさまはちようど子が父に仕えるようであった。読書して意味を理解し、みずから実行し、身をもつて考察した。家のやり方は、もっぱら『朱子家礼』に依拠していて、このときはじめて祠室を作った。今に至るまで子孫はしっかりとその方法を守っているという。安永八(一七七九)年四月二日に亡くなった。享年六十八歳、名古屋城の南の瑞宝寺に葬られた。

(石丸羽菜 記)

おわりに

大島絵莉香
(博士課程後期課程二年)

本稿は、尾張名家誌研究会にて発表・検討が行われた原稿を基にしている。前稿同様、参加者名及びその所属を記す。

田中千寿
(名古屋大学非常勤講師)

小崎智則
(愛知教育大学非常勤講師)

以下、名古屋大学大学院文学研究科の大学院生

中国哲学研究室

鬼頭孝佳
(博士課程後期課程二年)

石丸羽菜
(博士課程前期課程二年)

服部寛風
(博士課程前期課程二年)

日本文学研究室

森翔大
(博士課程前期課程二年)

中国文学研究室